



No.30

館外普及活動

昨年7月27日、「花室川で象を探そう会」が、学園都市の自然と親しむ会主催により、地質標本館の佐藤喜男主任研究官を講師として開かれ、つくば市・土浦市の近郊から小・中学生と父兄約80名が参加して象化石を探しました。この日見つかったのはナウマン象の牙の破片3点、臼歯の破片2点、骨の一部1点の他、別の脊椎動物の関節の一部1点の計7点です。中でもつくば市の中学生田中修一朗君の見つけた牙の標本(写真1)は、比較的保存がよく、現在第4展示室に展示されています。多数の化石の発見に、今後全身骨格も見つかるのではないかと期待されています(新聞7紙が報道)。なお、採集標本は全点地質標本館に寄贈していただきました。

新着標本

1) 苗木地方のペグマタイト晶洞

岐阜県東部を中心とする「苗木地方」は、日本有数のペグマタイトの産地として、現在でも多くの鉱物愛好家をひきつけるフィールドです。この苗木のペグマタイト標本が、新たに第3展示室右手の「花崗岩の解剖」コーナーにお目見えしました。標本の1個は水晶の他、カリ長石・チンワルド雲母(リチウムを含む雲母)・トパーズという、苗木地方特産ともいべき鉱物の大型の結晶からなるもの、もう1個は見事な黒水晶の群生するものです(写真2)。標本とともに、岩本石材(株)の御厚意により寄贈いた

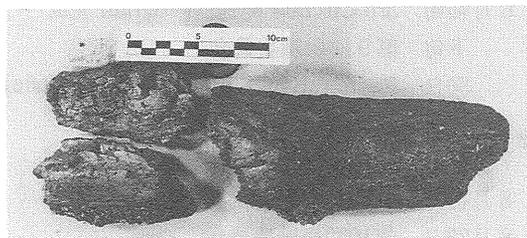


写真1 花室川産ナウマン象牙化石。
Palaeoloxodon naumanni (Makiyama).
(GSJ F13656) 産地：茨城県つくば市下広岡(更新世後期。田中修一朗寄贈)

できました。

このような苗木産ペグマタイト標本は、現地では岩本石材による「博石館」の他数ヶ所で見学することができます。(詳しくは地質ニュース431号p.61-62参照。)

2) 現生オウムガイ類

生きている化石の代表選手の1つです。広義のオウムガイ類は古生代カンブリア紀に出現し、古生代の前半の海洋に栄えていました。新第三紀以降急激に衰退し、現在、わずかに1属3~6種が南西太平洋及びオーストラリア東南岸に知られているだけです。このうち最も広く分布するオウムガイ(*Nautilus pompilius*)は、まれに黒潮によって日本近海まで漂流していることもあります。今回オウムガイの亜種2点(*N. pompilius suluensis*: フィリピン産, *N. pompilius belauensis*: パラオ産)とオオベソオウムガイ(*N. macromphalus*: ニューカレドニア産)、ヒロベソオウムガイ(*N. scrobiculatus*: インドネシア産)の2種を購入し、第1展示室奥のアンモナイトのジオラマの前に展示しています。最近改装したオウムガイのレーザーディスクシステムの映像と併せて絶滅したアンモナイトの生活の様子を想い描いてみましょう。

3) 三葉虫化石(2階休憩室)

2階休憩室に三葉虫化石のコーナーを設けました。展示されているのは、三葉虫化石7点にレブリカを加えた計50点です。寄贈していただきました太田昌秀氏、倉沢一氏、井上浩吉氏に感謝いたします。

登録標本最終番号(1991年9月30日現在)

岩石: R57882, 鉱物: M30068, 化石: F13656,
試錐: B335

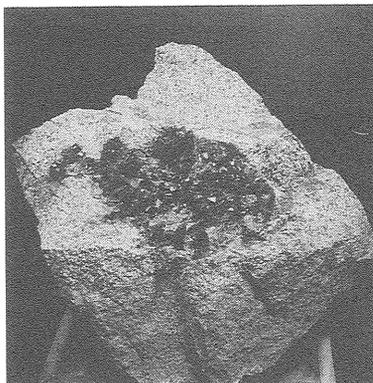


写真2
石英(黒水晶)の群生した見事なペグマタイト標本。岩本石材株式会社寄贈。(左右長約80cm)